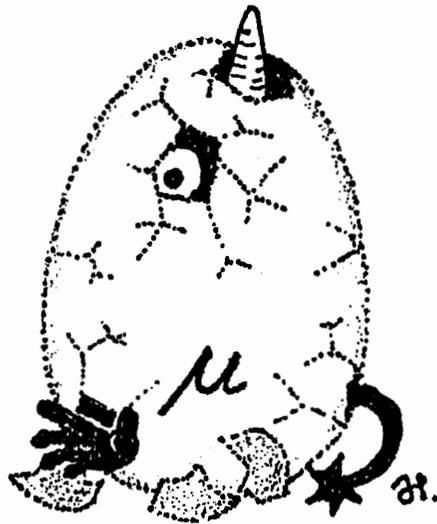


日本生物學會誌

第 16 号



日本生物學會

1983年 12月24日

北アイルランド、クイーンズ大学

訪 門 記

細 見 彬 文

ロンドンのヒースロー空港に着いたとたん、私は税関で失敗をやらかしてしまった。私は入国カードに職業をスタッフと書き、行き先をクイーンズ大学とし、入国目的を観光と書いた。これはだれが見ても奇妙だと思うに違いないのに、軽い気持でそう書いてしまった。これが入国管理官に疑われた。まず、お金をいくら持っているかと聞かれた。2000ドルだとすなおに答えた。お金を出してみろと言われた。ところが、私はお金を腹巻きの中にしまいこんでいた。腹巻という英語を私は知らなかった。人の多い場所で腹巻に手を入れることもできなかった。だましていると、若い係官は特別室で取調べるから来いという。荷物を持って特別室まで連れて行かれた。腹巻の中の2000ドルもそこで見せることになった。荷物は完全に調べ上げられた。しかし荷物の内容は、私の友人へのプレゼントの日本製の計算器だのカメラだのフィルムなどかなり高価なものがつまっていたので、係官は安心したようだった。これほどしつこく調べる理由は、アジア人の入国が失業率の高い英国で、大きな国内問題になっているからであった。私は、クイーンズ大学の友人から来た手紙を係官に見せた。それで事は全て解決した。係官は、アム・ソリーーと言ってくれた。やっと無罪放免されたが、イギリスの税関がこんないきびしいとは思ひもしなかった。

空港からロンドンまではバスを利用することにした。バスの隣の席にすわった初老の婦人が親切に案内をしてくれた。このバスはピクトリアまでしか行かないから、その先はどう地下鉄に乗りつけばいい、といったことを教えてくれた。この婦人はポーランド人で、夫は鳥類学をやっているが、ポーランド人故に高等学校にしか勤められず、大学で講義ができないのだと言っていた。車掌が来てバス代を払うことになったが、イギリスのお金は全く持ち合わせていなかった。車掌はウインクして、君はただでいいよと言ってくれた。イギリスの人はおおらかなものだと感心した。

ホテルはケンシントン公園のすぐ北側にあるアトランティック・ホテルという安宿にした。

これは丸善に並んでいた「1日5ドルのイギリス」という本を見ておいて安宿をさがしておき、あらかじめ手紙を出しておいたのである。安宿だから部屋はあまりよくなかった。ホテルを出てケンシントン公園を散歩した。ランカスターゲイトという門をくぐって公園に入ると、まずその広さに驚かされるとともに、300年は経ただろうと思われる大木のたたくまに眼をみはった。公園内の小径をゆっくり歩いた。公園の広さは神戸市の一つの区ぐらいはあろうと思われた。そこここにリスがいた。人がパンクスを投げるとスズメが寄ってきて安心して餌をつつついていた。人を恐れるというような様子がまったくないのに驚いた。森の中のベンチに老人が一人すわっているような風景もよかった。この公園を見て、ロンドンは何んとゆとりを持った所だろうと思った。公園を横切るのに1時間もかかってしまった。公園の管理はゆきととき、自転車やラジオを持ち込むと100ポンドの罰金が課せられることになっていた。

ホテルにもどって喫茶室にいと、横にいた男がどこから来たのかと話しかけてきた。日本からだと言うと、それは遠い所から来た、自分はアイルランドの大工だと言っていた。私はこのアイルランドの大工と親しくなり、二人で街をぶらついた。緑の多いロンドンの街が、私にはどこもかしこも高級住宅街のようにみえた。アイルランド人は、どこかいいバーはないかといっせがしていた。どこのホテルでもバーはあるのだが、彼はバンド付きのバーがどこかにないかと人に聞いていた。さがしあてたバーは客が30人位入っており、ステージがあって3人のバンドマンがいて司会をかね、客が一人づつステージに上って歌うような所だった。皆が歌っている歌は聞きなれない歌ばかりでさっぱりわからなかったから、私はもっぱら飲むことにした。ここではジョニーウオーカーもオールドバーも普通の酒である。特に高いわけではない。私は少しこってグレンヒデッチのオンサロックを注文した。例のアイルランド人がステージに上って歌った。歌が終ると私の手を強くひいてステージにまで連れていった。私に歌えという。困ってしまった。一呼吸おき、マイクに向かってこう言った。皆さん、私は今日、日本からロンドンに着いたばかりです。日本のフォークソングを歌います。そして福知山音頭を歌った。バンドマンは聞いたこともない曲に困ってしまって演奏できなかったが、私が歌い終ると客から大きな拍手がおこった。店を出る段になってアイルランド人は、何を思ったのかヘイグの大ピンを一本買って私にくれた。

ロンドンには二日間ただけである。私はベルファストのクイーンズ大学にシード博士を訪ねることにしていたので、飛行機でベルファストに向った。ベルファストに着くと、空港の荷物検査にきわめてきびしく、武器を持っていないかどうかトランクの中のすみからすみまで調べ上げられた。理由は、ベルファストが北アイルランド共和国軍とイギリスの間で内戦状態になっているためであった。空港の周りは銃弾を防ぐため厚い鉄板のかこいがとりまいていた。

空港から大学に電話をかけた。イギリスの公衆電話はすごく不便で、距離が近ければ硬貨1つでつながるが、少し距離が遠くなると不通の信号があって硬貨がもどってきてしまう。硬貨を3つ入れてやっと電話がつながった。大学側の電話には警備員が出て、シード博士は大学にいないという。大学から私を迎えに来てくれないかと厚かましく聞いたら、それはできないと言う。タクシーもない田舎空港で困ってしまった。ともかく大学まで行くと告げておいて自動車をさがした。運よく、白タクがあった。相乗りだったががまんした。相乗りの相手は40才位の婦人だったが、なんにもしゃべらなかった。タクシーの走っている間、何台もの装甲車に出合った。装甲車は兵士を満載していた。不気味な風景だった。タクシーは低い丘をいくつも登り下りしながらペルフアストに向っていた。丘の上から見渡せるのは、全てヒツジの牧場であった。

クイーンズ大学は古色蒼然たるレンガ作りの建物で、歴史を感じさせた。警備員にシード博士をたずねて日本から来たことを告げると、それは遠い所からよくきたということで、控室に連れて行ってくれた。数人の警備員が集まり、皆で歓迎のコーヒーを沸かしてくれた。私は、アイルランド人からもらって荷物になって困っていたヘイグを、皆で飲んでくれと言って渡すと、大変喜んでくれた。シード博士に連絡をとってくれとたのむと方々に電話をかけてくれたが、ともかく家にはいないと言う。そのうちシード博士の友人のバンホード博士が車で迎えに来てくれた。バンホード博士の家はシード氏の家のつい近くだから、私を一時あずかるという意味だった。

私は、バンホード氏の好意で氏の宅に世話になることにした。彼の家には高校生になる長男をはじめとして、男の子ばかり3人の子供さんがいた。子供さん達に私は日本製のラジオをプレゼントした。しかし、ちっともうれしそうな顔をしてくれなかった。イギリスの子供はこんなものにはあきているのかなと思った。奥さんが、有難うと言いなさいとたしなめると、やっとサンキューと言ってくれた。バンホード氏の奥さんは医者で、しかも学位も持っている人だった。夕食は奥さんが手作りで私にごちそうしてくれた。私は少しいぶかって、「あなたは医者の上に医学博士である。なのに、毎日の食事はあなたが作るのですか」と聞いてみた。答は、「もち論ですよ。主人も子供も食事のことはなにも手伝わないですよ」だったので、我家と同じだと思いつつも、小生の女房が医者で博士だったら、全てを女中さんにさせなければならないだろうと思った次第であった。<こんなこと書いたら、恐い会員から怒られるよ。ほくは知らない。— 会長> 奥さんは、「私達も日本人と同じようにお米を食べることがあるのですよ」と言って、家にとってある米をとり出してきて見せてくれた。それは砂糖ビンの底に約1センチばかり入っているお米であった。米を食べると言ってもこれでは話にならない。英国人はスープなどの中に米をスプーン一ぱいほど入れて、野菜の一種として使うのだと言うことを、奥さんの話から知った。食事の後、奥さんが、「あなたのおさら、かたずけてもいいですか」と聞くものだから、小生は「オ

「オーケー・サンキュウ」と言ったところ、「オーケーはアメリカ人の使う悪い言葉ですよ」とたしなめられてしまった。

ベルファストの夏の日には長い。まだ太陽がカンカンと照りつけている午後9時ごろに、奥さんは子供達を寝かしつけていた。不思議なところだと思った。私はバンホード氏のさそうまに散歩に出た。すぐ近くが北アイルランドの国会議事堂であった。一平方キロほどの小高い丘の上に、その建物はあった。建物は、議会が開会中なのでしまっていたが、その周りを自動小銃を持った数人の警官が警備していた。遠くから鉱山のダイナマイトが爆発するような音が二発、三発と続けて聞こえた。バンホード氏はアイルランド共和国軍の仕かけた爆弾がどこかで爆発したのだと言っていた。それにしてもぶっそうな所だと思った。しかし、小さなイギリスの国内で独立戦争をやるとは不思議な気がした。バンホード氏に聞くと、スコットランドでもウエールズでも独立運動があるのだそうである。この国はグレート・ブリテンなどと称していばっているが、どうも内部はたががゆるみ始めている。

夜の11時になっても太陽が輝いていた。シード氏宅に電話をすると家で待っているという返事があったので、私はバンホード氏に送りとどけてもらった。シード氏に始めて会ってびっくりした。あまりにも若いのである。私が想像していたのは60才位になる老人であった。しかし彼はまだ30才を出たばかりであった。でも彼はムラサキイガイに関する重要な論文をいくつも発表していたから、私が老人だと思いこんでいたのも無理はなかった。私は内心、この男は切れ者だと思った。シード氏も奥さんも私をてい重に迎えてくれた。彼の家は広く、20畳位の応接間、10畳の寝室が二つ、8畳ほどのバスルームに4畳ほどのトイレ、それに8畳ばかりの食堂が付いていた。私が広くて立派な家だと感心すると、彼は英国の中流家庭の標準的な家だと言っていた。私は正直に、私の家は君の家の3分の1のスペースだと言ったら、彼は日本は人口密度が高いからだろうと言っていた。私は否定し、日本の人民はまだ貧乏なのだ、人民の富の蓄積は100年英国におくれているのだと答えておいた。

私はシード氏のお宅に数日間お世話になることになった。シード氏の奥さんは小学校の先生をしていた。私の家内も小学校に勤めていると言うと大変近親感を示してくれた。食事から洗たくまで奥さんのお世話になってしまった。シード氏宅の食事は質素で、朝はパンにコーヒーに卵焼だけだった。昼間はシード氏と二人で外に出ていることが多かったので適当なレストランで簡単な食事をした。夕食は羊の焼肉に焼きトマト、パン、コーヒー、ミルク位で毎日変化のない食事をした。イギリス人はなんとつつしみ深い食事をしているのかと驚かされた。

シード氏は私を何度か大学の自分の研究室に連れて行ってくれた。彼はこれまでにムラサキイガイの産卵期を推定する論文を出していた。それで彼はこのことに興味を持っており、日本の

ムラサキイガイの産卵期はいつごろかと聞いてきた。私はムラサキイガイの定着期から推定すると3月から4月ごろだろうと答えた。ところが彼は、その推定はよくないと言い、卵巢の季節変化を追ったのかと聞くので、否と言うと、彼は箱にしまった何百枚ものプレパラートをとり出し、これは自分の作ったものだが、卵巢の変化を顕微鏡下で2週間ごとに追っていくと正確な排卵時期とその率がわかると言いながら排卵前後のプレパラートを顕微鏡にかけて見せてくれた。私は日本でもこうした仕事が必要だと思ったと同時に、小生の痛いところをつかれたと思った。

彼は私を連れてベルファストの街のあちこちを案内してくれた。そして私に決して自分一人で街を歩かなくてくれとも注意した。街にはアイルランド共和国軍のゲリラがたくさんおり、金品を没収されるからだと言っていた。数ヶ月前にやはり彼を訪ねてきたスエーデン人の学者がベルファストの中心街でカメラを没収されたのだと言っていた。彼が案内してくれる博物館でも植物園でもまた百貨店でも、入口では二人ともデテクターで体中をなぞまわされ、手留弾や小型爆弾を持っていないか調べられた。テロ活動はそれほどきびしく取締られていた。郵便ポストには爆弾が投げこまれないように、手紙一通がやっと通る位のスリットのある厚い鉄板が投入口によく接されている程だった。それほど取締りがきびしいにもかかわらず、日に二三度はどこかで爆弾のさく裂する音が響いていた。

シード氏はIBPでも重要な役割を負わされていた。IBPというのは国際生物学計画といって、世界の生物生産を測定し、それに付随する研究方法を検討することを主な仕事として、1970年代前半にやられた大がかりな生態学的研究である。これには世界の大部分の生態学者が参加し動員された<“参加”と“動員”は相当違うで——会長>。もち論、世の中には一理屈も二理屈もこねる生態学者がいて、能力はありながらも全く協力しなかった人達がいるにはいた。その理由は次のようなことからであった。IBPは世界の食糧生産の可能性を推定することを大きな目的としていた。しかし、計測されるのはタイの森林やマレーシアの湖沼といった場所で、農地の生産力ではなかった。食糧生産は農業生産によって決まるのだから森林の生産力を計っても意味はない。もし東南アジアの森林の生産を測定すれば、日本の東南アジアの森林伐採と収奪に手を貸すだけだというのが例えば一つの理由だった。しかし、私のように大学に勤めていない者はそんなやりとりを聞きながらも、IBPに協力したいと思ったところで、始めからお呼びでなかった。小生は腹立ちまぎれに、理屈をこねる方に賛成していた。<逆っていたのは“お呼びでなかったから”だけかいな——二理屈こね生態学者> IBPには特別に生産力の高い生物であるムラサキイガイについて特別の研究セクションが作られていて、その生物だけの生態や生産力を計ることになっていた。その部門計画の責任者はプリモウス臨海実験所のペイン博士であった。シード氏は名誉にもその部門の中軸たる生態学部門を総括する責任を引き受けていた。彼は私の滞在中もタイプで原稿書きをしており、私を横に座らせておいて、自分の書いた原稿を

ゆっくりと時間をかけて読んで、ムラサキイガイの生態学の水準がどこまで達しているかを私に聞かせてくれた。なかなか親切な人であった。その中で引用文献も示してくれたが、小生の論文を二編引用してくれていたのも、私も少しうれしくなった。日本の連中は、小生の論文などだれも気にとめてくれないのに、英国の学者はちゃんと小生の論文を読んでいるのではないかと思つたものである。シード氏達が書き、ペイン博士が編集した、イガイ類の生物学の本はその後大冊となって出版された。

しかしシード氏の興味は生態学から系統学の方に向つていた。彼はイギリスから北海、バルト海方面にいるムラサキイガイと、地中海にいるムラサキイガイとの違いについて研究を始めていた。そしてイギリス方面にいるものは、マイタレス・エデュリスとし、地中海方面にいるものはマイタリス・カロプロビンシアリスであると明確に区別していた。そして彼が言うにはイギリス南部からスペイン北部、ポルトガル海岸にかけては、それらの中間的な雑種がいると言うのである。エデュリスとカロプロビンシアリスは一見して貝殻の厚みも色も違う。エデュリスは殻が厚く、まっ黒い色をしているが、カロプロビンシアリスは殻が薄く茶色っぽい色をしているものが多い。その上、彼が言うには歯の数が違うと言う。エデュリスは歯の数が4本のものが多いがカロプロビンシアリスは2本から3本のものが多いと言うのである。しかしこの2種は素人には見分けにくい。けれども彼ははっきり別種として区別していた。そして彼の考え方では、これら2種は昔同一種であった。しかしそれらが地理的隔離によってだんだんと2種に分れたが、またそれらが出合う機会を得て中間種ができつつあるのだというように考えていた。2種に分れた時代やいきさつを化石から推定してゆきたいと言っていた。

神戸で採集したムラサキイガイを彼に見せると言下にマイタリス・カロプロビンシアリスだと断言してくれた。すなわち地中海型の種である。ところが私はそれまでの自分の論文にマイタレス・エデュリスの名を使っていた。これは誤りである。しかしこれは私の責任ではない。日本の全ての貝の図鑑にはエデュリスと記載してある。日本のほとんどの分類学者はエデュリスだと言っている。日本のものはカロプロビンシアリスだと言っていたのは貝の分類学のせき学、黒田徳米博士ただ一人であった。やはり黒田先生は偉いものだと感心させられた。常識的に考えても日本のものはカロプロビンシアリスでなければならない。例えば、瀬戸内海の水温は最低で10度位にしかならない。ところがイギリス沿岸は5度以下に下る。イギリスの海よりも地中海の方が環境ははるかに瀬戸内海に似ている。それに日本のムラサキイガイは昔から日本に住んでいたものではない。1934年(昭和9年)神戸港で金丸担馬氏がはじめて見つけられたもので、その後、神戸港から北海道を除く日本全体に拡ったものである。これがどこから来たのか疑問であったが、シード氏や黒田先生の言われるごとく、カロプロビンシアリスだとなれば地中海から船底に付着して運ばれたものだと言わねばならない。1934年以前には断じて日本にこの貝はい

なかったのである。それは1932年に出版された矢倉和三郎氏の兵庫県貝類目録には記載されていない。ムラサキガイほどの普通種で、いまでは貝の中でこれほどポピュラーな種はいないほどのものが、目録に記録がないというのは、それ以前にはいなかったと考えざるを得ない。シード氏の所までやってきて、瀬戸内海のムラサキガイが地中海起源だということがはっきりしただけでも大きな収穫であった。

バルファストの東方にストラングホード・ロッホと呼ぶ海につながった湖がある。この湖をとりまくように一つの半島が北から南に40キロメートルにわたって横たわっている。半島の東はアイリッシュ海である。この半島の山甲の先端に小さな町がある。そこにクイーンズ大学の臨海実験所がある。シード氏は私を車に乗せてここまで連れて行ってくれた。車は半島の東海岸を走ったので、左は海、右手は低い丘のつらなる風景がつついた。この丘の中腹には約1キロメートルごとに小さな城やとりでが姿を見せた。この国は本当に古いものがよく残っている。臨海実験所は小さな建物で、全体で5部屋ほどしかなく、宿泊施設もなかった。ここには二人の大学院生がいた。一人はジエンキンソンといいもう一人はユーストンとよぶ男であった。ジエンキンソンは私達にコーヒーを作って歓迎してくれた。ユーストン君は片方の足全体を石こう固定し、包帯を巻き松葉づえで歩いていた。どうしたんだと聞くそ、彼の住んでいる下宿の隣のバブがアイルランド共和国軍の爆弾でふっとばされた時、下宿にも爆破が及び、寝ていた彼は足を骨折するとともに大けがをしたとのことであった。アイルランド共和国軍はこんな田舎町でもテロ活動をやっていた。だから田舎町でも警察の派出所は窓は全て太い丈夫な金網でものものしくおおい、囲りは土のうが高く積み上げられて、いつでも銃撃戦ができるようにそなえられていた。シード氏に、こんな物騒な所において平気なのかと聞いたところ、北アイルランドが、アイルランドに併合されるようなことになれば、イングランドがウエールズに行こうと思うが、さしせまった危険はないので、クイーンズ大学にいても大丈夫だと言っていた。

しかし、こんな戦争的な状況にあってもイギリスという国はいい国だと思った。どこへ行っても美しい。どこにいても手入れのよく行きとどいた公園の中にいるようだった。街にいれば街がすばらしかった。茶色系統にととのえられたレンガ作りの家々は並木の緑とよく調和していた。電柱が一本もないので街は一層美しかった。日本の街の美観を乱している一つは電柱があることである。日本でも電柱をとりのぞいてしまったら街の美観はかなりよくなる。日本の街々がイギリス並みに美しくなるには確実に100年は必要であろうと思われる。だから日本は100年おくらせていると直観的に思うのである。<100年たった日本でも、"北海道共和国軍のテロ爆弾がハレツしているかもしれないね——会長> この直感はそれほどあてずっぽうのものではないと思う。シード氏の奥さんが街を案内しながら、この一角は貧困家庭のために政府が安く貸している家々ですと説明してくれたところも、私からみればずい分せいたくな家で、私の家より

もはるかによかった。少なくとも5DKはある気のきいた建物だった。これならイギリスの貧困階級になった方が今の自分より良からうと思った。<人は家のみにて生きるにあらず——会長> イギリスは経済的にはイギリス病にかかり、低成長とインフレ、失業問題が深刻だと日本では報じられているが、イギリスに来てみるとイギリス人は皆優雅で堂々としている。イギリス病といったものはどこにも見当たらない。シード氏にこのことをたずねてみると、貧困家庭は政府が生活補償をやっているので問題はないと言っていた。郊外に出てもイギリスはまた美しかった。少し起伏のある広々とした牧草地帯がつづいていてとても美しい。こんな地形ならどこでもゴルフ場になる。イギリスという国はゴルフにはちょうど都合がよい地形になっていて、どこでもゴルフ場の作れる適地である。ゴルフがイギリスから起きたのは当然のような気がする。日本のように無理に山をけずり谷を埋めてゴルフ場を造成することはない。そもそも日本でゴルフをやるのは地形からして無理なのである。

シード氏とは色んな話をした。彼は日本に関することを色々たずね、機会があれば日本に行ってみたいものだと言っていた。彼は私に妙なことをたずねた。ここ北アイルランドにも日本の企業が進出して工場経営をしているが、どの企業でも朝の会合で社歌を強制的に歌わせる。なぜ労働者に歌を歌わせるのかと聞かれた。私もこの質問には困った。私は労働者が会社を愛するようになるためだと答えたが、彼は労働者は自分のために働くのであって会社を愛する必要はないかと言う。私は答えることができなかった。またこんなことも聞いていた。日本には字が何種類あるのかと言うから、私は中国から来た漢字というのは、ほぼ5万1千字ある、そしてアルファベットに相当する表音文字が2種類あって、それらが50個づつ存在する、だから私は今もって読めない漢字が無数に存在するのだと言ったら、ムラサキイガイの研究ばかりしていて、基礎的な勉強をしていないのでないかと言う。私はあきれて、5万種という字の多さがどんなにすごいことなのか、英国人にはわからないだろうと言っておいた。するとこんどはシードという名を漢字で書けというので、種子と書いたところ喜んでた。

ところで二人の話は英語に関する事に及んだ。私は英語で論文を書くのにどれほど苦労しているかを説明した。私はイギリス人やアメリカ人の書いた論文から、色んな言いまわしを二千枚以上のカードに集めている。たとえば、サイズ分布に関する事なら、サイズ分布上の二つの山が合体するとか、補充によってサイズ分布は3山型になるとかを英語ではどう表現するかという言いまわしを集めて分類し、論文を書くときは、それを参考にしている。そんなことを説明したところ彼は驚いていた。そして英語は全部私が修正してあげるから送ってよこせと言ってくれた。私は書き上げたばかりの論文原稿を都合よく持っていたので、これを修正してくれと言うと、the を a にしたり、無冠詞のところの the を入れたりしながら一時間位で仕上げてくれた。これは便利なものだと思った。しかし私が、どうしてここには the が必要なのだとたずねても、そ

の方が読み易いからだと言うだけで、文法的な理由づけは何もしてくれなかった。しかし彼も外国語でサンマリーを書くのが大変だと言っていた。彼は自分の論文にフランス語のサンマリーを付ける。彼の奥さんがフランス語が得意なものだから、彼は奥さんに論文を見せて修正させる。それでもフランス人の学者にそれを見せるとまっ赤に修正しなおされたと言っていた。イギリス人がフランス語についてこの通りだめなのだから、我々日本人が英語をまともに書けなくともあたり前のことなのである。生物学の研究は生物学者ならだれにとっても世界のすみずみまで眼を光らせて論文を集め、それを読んで参考にしなければならぬことになっている。彼もできる限りの論文は集めている。それがロシア語で書かれていようと、ヘブライ語で書かれていようと集めるのである。イギリスでは翻訳制度が発達していて何語で書かれていても金さえ出せば英語になるという便利なシステムがある。彼は先だってトルコ語で書かれた論文を翻訳してもらったところ、代金が高かついたとなげいていた。小生は、一人でも多くの人が自分の論文を読んでくれるようにと願って論文は必ず英語で書いているのだが、イギリスの学者もまた語学で苦労しているのである。英語で論文を書く上で、最もむずかしいのは適切な単語を選ぶことだと私が言うと、それは英語国民の我々としても同じことであると言っていた。しかし、シード氏の論文の英語はむずかしい。それで小生は、あなたの英語は難しく困ると苦言を呈しておいた。

私はこんな調子でシード氏と一週間をすごし、再びヘルファスト空港へ向った。シード氏が車で送ってくれた。道ばたに農民がイチゴを売っているのによく出合った。空港でシード氏と別れた私は、マンチエスター行きの飛行機に乗った。

魚 陸 に 上 る (11)

— 魚 から 人 間 ま で の 歴 史 —

奥 野 良 之 助

第 2 章 あらかじめ心得おくべき若干の知識 (続)

7 せきつい動物とは何か

「せきつい動物とは何か」というのは、実は私が大志をいだいていつ果てるとも知れぬこの連載をはじめた目的そのものである。したがって、この問題は、この連載を書き終えるまで私にもわからぬことであり、読まれる方もまたそれまではわからぬ仕掛けとなっている。それを、「あらかじめ心得おくべき知識」の中に書いてしまったのでは、そのあと書くことがなくなってしまおうではないか。

などと、あらかじめ考えて心配する人がいるかも知れない。そこで、まず、知識とか理解とかいうことについて、知識を与え、理解を求めることにしたいと思う。

「せきつい動物とはせき索動物のなかで、頭をもち体の中軸にせき柱（せきついからなる）の発達した一群をいう。体の背側には中枢神経が走り、腹側には内臓器官を入れる広い腔（体腔）がある。そのほかごく下等なもののはかは、運動器官として2対のひれか肢があり、血液は赤く、循環系に心臓が発達する。」

これは、かつての京都大学の発生学の教授であり、ドイツ留学中にしょう婦にドイツ語を習ってえらくなったといううわさのある、岡田 要 先生が、平凡社「世界大百科事典」に書かれた“せきついでうぶつ”の項の初めの部分である。

さて、ほとんど予備知識のない人が、というのは、世の中の人のお大半は動物学の知識など持っていないし、持っていないでも日常何のさしつかえもないし、だからそれでよいのだけれど、ところがそういう人も、家には大い百科事典を持っていて、万一必要になったときにはそれをひくことになっていて、だからこんな想定が成立することになるのだが、とりあえず予備知識のない人がこれを読んだことにしよう。

「せきつい動物とはせき索動物のなかで」ときただけで、まず「せき索動物」にひっかかる

ことになる。せきつい動物すら知らないのに、より専門的なせき索動物がわかるはずがない。もっとも、百科事典とはその点便利にできていて、「せきさくどうぶつ」という項もちゃんとある。そこでそれをひいてみると、やはり岡田先生の筆でこう書いてある。「ホヤやサルバの類を含む尾索類、ナメクジウオで代表される頭索類、およびせきつい動物の3群をひっくるめてせき索動物門とする。それはこれらの動物では体制がどんなにちがっていても、幼生期には必ず、ときには一生涯、〈せき索〉と称する独得の構造をもっているからである。』妙なことを思い立ったおかげで、またもやホヤ、サルバ、ナメクジウオをひかなくてはならなくなった。すべてのものことは、すべてお互いに関連しあっているとされているから、この調子でいくと、百科事典全30巻のすべてをひかなければ、「せきつい動物」についてのこの短い文章ひとつ、理解できないことになりそうである。

それはともかく、もとへもどって、「体の背側には中枢神経が走り、腹側には内臓器官を入れる広い腔がある」という記載が何を意味しているか、この連載を忠実に読み、そして、再放送のテレビ映画の最後のシーンで「あっ、これは前に見たことあるで」と同時に叫んで顔を見合わせることの多くなった私たち夫婦とちがって、一度読めば絶対に忘れない読者の方なら、「ああ、あれか」と、すぐ思い出していただけるだろう。かの高名なるキュウ"イエ先生の4大部門のうちの、せきつい動物の基本的体制であった。

かくのごとく、ものごとを知ろうと思えば、予備知識なるものがどうしても必要なのである。本を読んでわからないのは、そこに書いてあることを知らないからである。本を読んでわかるのは、そこに書いてあることを知っているからである。知ってることを書いてある本など読んでもつまらない。といって、わからないことを書いてある本を読んでも何にもならぬ。要するに、読んで何かを得られる本など、この世には存在しないのである。この恐るべき“真理”に達した私は、これを深く心に秘めておくことにした。何となれば、私は大学の教官であり、この真理が学生の間を広まれば、勉強する学生などいなくなり、ひいては失業してしまうではないか。私がかくも秘しているのに、最近どうやらこの真理は、除々に学生に知れてきたようである。

ところで、かのギリシャの哲人ソクラテスは、すでにこの真理を見ぬいていたらしく思われる。彼は、知というものは生後に新しく獲得されるものではなく、子供が何も知らないのは前世で知っていたことをただ忘れていただけなのだという。うそだと思う人は、プラトンの対話編「メノン」をぜひ読まなくてはならない。その中でソクラテスは、数学のことを何も知らないある少年に向かって、何も教えずただ質問をくりかえすだけで、幾何の問題を解かさせている。ソクラテスによれば、学習とは忘れていくことの想起にすぎないのである。この真理を体得した人は、「それは知らなかった」などと言ってはいけない。「それはちょっと忘れていた」というべきである。この方がかっこうがいい。もっとも、私のように、せっかく想起したことをまたすべて忘れてしまって、その後で死んだら、来世は大変だろうね。

このソクラテスの学説は、最近の生物学の進歩によって証明されている。親からもらう遺伝子、DNAの中に、すべての情報がつまっているのであって、我々はそれを、1つずつ想起しているのだ、とのことである。ちょっと考えると、新しく覚えるより想起するだけの方が楽なようだが、この「想起」には「学習」とちょうど同じだけの努力を必要とすることになっていて、なんのことはない、想起と言いかえても少しも楽にならないのである。

またもや何の話かわからなくなりつつあるが、わかったようでわからぬ話というのは、日常そこらにごろごろしていて、別に珍しいことではない。人間は神様とちがって、もともとそのつくりが不完全なものだから、完全な理解など望みえないのである。その昔、おしゃか様はさまざまな苦勞の末に、ポダイ樹の下でサトリを開いた。そのとたん、シンラ万象、天と地の間の一切のことが、明白となった。つまり、全てを完全に理解したのである。そして、おしゃか様は絶望した。何もかもわかってしまったら、もはやする事は何もなくなる。そこで彼は、そのままネハンに入ろうとした。ふつうの人間が死ぬことを死亡といい、天皇は没するといい、坊生なら寂滅といい、中国大陸へ出かけて行ってたくさんの中国人を殺すことを、侵略とは言わず進出というらしいが、おしゃか様が死ぬことは、ネハンということになっている。その漢字だって知ってるが、タイプの活字にないから打てない。かくてネハンに入ろうとしたおしゃか様を見て、びっくりしたのが天帝、つまり天の神様である。「あそこまで理解した人間を、このまま死なせてしまうのは、どう考えても惜しい。だれか行ってひきとめてこい。」何しろ、事は急を要する。そこで、天界随一の健脚「イダ天」が、全権を委任されて走って行くことになる。「サトリは自分で開くもので、たとえわしでも教えてやることはでけん。だから生きていてもしょうがない」などとごてるおしゃか様を、「まあ、そういわんと」となだめすかし、ようやくイダ天はネハンを思いとどまらせて、任務を全うした。「かくて仏教が成立したのである」と、昔読んだある本に書いてあった。したがって、おしゃか様は、言うてもせんないと思いつつ、いやいや言うてはるのである。時には、全くのうそもつく。それを、「うそも方便」という。

要するに、すべてを根本まで理解すれば、死ぬか、うそつきになるか、どちらかしか道はない。どちらもいやな人は、だから、あまり深くものごとを理解しない方がよいのである。理解にはいろいろな段階があって、高層ビルの高遠エレベーターみたいに一足とびに上昇するのは体に毒だから、理解というものは一段づつ深めていくのがよい。

かくして、理解は除々に少しづつ深めていけばよいことになった。だから、せきつい動物とは何か、もまた、それをより深く理解するためには、あらかじめせきつい動物とは何かを理解しておかねばならぬ、ということになる。もっとも、この連載を最後まで読み通したあと、せきつい動物についての理解がより深まるかどうか、そんなことに私は責任を持ってない。

ところで、理解という言葉ほど、理解しにくい言葉はない。理解の「理」という字は、理論

の理であり、理性の理であり、道理の理である。「理」は「ことわり」という意味であって、かの毛沢東が「造反有理」（むほんをおこすことは道理がある）とつぶやいたことから文化大革命がおこり、それをいちばんえらい毛沢東が言ったのではかっこうがつかない、と、野良氏が「哲学雑話」（本誌第6号）で書いている、あの「理」である。そういえば、私の属している金沢大学理学部にも「理」の字がついていた。こともあるうに、私は「理論の学部」「理性の学部」「道理の学部」に存在していたのであるが、籍をおいて10年余り、そんなこととは露知らなかった。我が学部の中に、理論だの理性だの、まして道理などが、ころがっているのを見たことがないからである。まあ、「理屈」くらいなら、少しはころがっている。それも大したことはなく、私が理屈を振りまわしたら、たいていの「理」学部人は閉口してしまった。私こそ、「理」学部の権化（ごんげ）というべきか。

さて、「理」が「ことわり」なれば、理解とは「ことわりを解すること」である。ところがものの「ことわり」など、そう簡単に解せるものではない。借金の「ことわり」さえままならぬ世の中ではないか。

「ことわり」が理解しにくいのは、それが抽象的なもので、実在しないからである。かつてケーラーという学者は、チンパンジーをたくさん飼って、ありとあらゆるテストで虐待し、彼らの血と涙の成果を「類人猿の知恵試験」（宮 孝一 訳、岩波書店）なる本にまとめ、業績をあげるとともに金もうけした。最近では、チンパンジーの赤ん坊を自分の家につれてきて、自分の子供といっしょに育てたり——こんな親をもった子供こそ、たまったものではない——、コンピューターを使ってチンパンジーと“対話”したと称したり、チンパンジーの能力を調べた本がいくつも出ているが、1917年に書かれたこの本は、その古さにもかかわらず、その内容の面白さにおいて、これを抜く本はまだ書かれていない、と私は固く信じている。

ケーラーは、チンパンジーにいろいろなことをやらせてみた。オリの前にバナナをおくと、手をのばしてとる。実は、これはチンパンジーを含むサルにしかできない芸当なのである。なぜなら、動物の中で「手」をもっているのはサルだけだからである。ネコなら「前足」をのばしてとる、と表現しなければならない。もっとも、ネコがバナナをとるかどうか、定かではないが。次に、手をのばしてもとれないところへバナナをおき、そのかわり棒を1本入れておくと、チンパンジーは難なくその棒を使ってバナナをひきよせる。最近では、野生のチンパンジーが、木の枝をふりまわして仲間げんかをやったり、ヒョウにおそいかかる、とは少々オーバーで、ヒョウから身を守ったりするということがわかっている。さらに、バナナをもっと遠くにはなしておき、太さのちがう中空の棒を2本入れておくと、これは相当時間はかかるが、やがて2本の棒をつないで長くして、バナナをひきよせるという技術を発見する。餌づけという方法は、日本のサルグループ、といってもサルの集団ではなくサルを研究する研究者の集団であるが、開発したユニークな方法であるが、自らチンパンジーの群れの中にはいって行って慣れさせる、人づけという方

法を発明したグドール女史が、シロアリのアリ塚に穴をあけて、草の軸や木の枝をつっこみ、それにとりついたシロアリを食べるといふ、いわゆるチンパンジーのシロアリ釣りを発見して大騒ぎになったのは、ごく最近のことである。野生のチンパンジーが道具を使う、道具は人間の専有物ではない、というわけ。さらに、あるチンパンジーは、木の枝の先を歯でかんで、シロアリがたくさんくっつくようにした。これは道具の改良と見なされている。

ケーラーの次なるテストは、天井からぶら下げたバナナの下に木の箱をおかせてとらせる実験である。チンパンジーは、足りなければ箱を積み重ねるといふ方法を発見した。最高4つも積み重ねたものもいたという。いじわるなケーラーは、箱を使うことを覚えたチンパンジーの前から、箱をとり去ってしまった。しばらくうろろうろしていた彼は、部屋のすみで見ていた飼育係のおじさんのところへきて、その手をひいてバナナの下までつれてきて、肩にとびのってバナナをとったそうである。こともあろうに人間様を道具に見立てたわけである。ところが、やはりサルより人間の方が一枚上手で、次のときその飼育係は、チンパンジーが肩にとびのった瞬間、すっとしゃがみこんだ。これではバナナはとれない。チンパンジーはしばらく困っていたが、やがて、飼育係のうしろへまわって、そのお尻を押し上げようと試みたそうである。これぞまさしく「道具」の改良にちがいない。

このように書いてくると、なかなか面白そうな本だから一度読んでみようか、などという気をおこす人が出てくるかも知れない。もちろん読んでいただくに越したことはないが、一言注意しておく、この本はもともとケーラーが科学論文として書いたものをまとめたものだから、気楽に通読できる本ではない。しかし、じっくりと読みこむと、なかなか味の出してくる本である。ここまで知った上で、読もうと読むまいと、それは私のあずかり知らぬことである。

ところで、チンパンジーの知恵にもやはり限界はある。2つの部屋を通りぬけるようにし、一方の部屋にバナナをつるし、もう一方の部屋に箱をおいておく。たったこれだけで、箱を使ってバナナをとることをよく“知って”いるチンパンジーは、どうしようもなくなるのである。彼は、バナナにとびこごとジャンプするがとどかない。もう1つの部屋へいって、なじみの箱をながめるが、その箱をとなりの部屋へ運ぶ知恵は、遂に出なかった。彼が、バナナをとるのに箱を使えるのは、バナナと箱を同時に見るときだけで、別々に見たのでは両者をむすびつけることはできなかったのである。

この実験からいったい何がわかるかという、チンパンジーの思考はまさに具体的・即物的であって、箱はあくまで箱であり、それをバナナをとるための“道具”であるとは考えられない、ということがわかる。これは、ロシアのある学者もまた証明している。まず、チンパンジーに、オケの中からヒシヤクで水をくんでタキビにかけると、火がジュッと消えて白煙があがるといふことを見せる。もともと軽薄なチンパンジーは、ひどく面白がって、タキビの火を消すことに熱

中する。そこで、池にイカダを2つ浮かべ、その1つでタキ火を燃やし、もう1つに水を入れたオケとヒシヤクとハシゴをおく。イカダにのせられたチンパンジーはどうか？ 彼はまず、2つのイカダの間にハシゴをかける。ついでヒシヤクをとり、オケから水をくみ、ハシゴを渡ってタキ火に水をかける。1度で消えなければ、またハシゴを渡ってオケから水をくんで、ハシゴを渡ってタキ火にかけ……。イカダは“水”に浮かんでいるのだが、チンパンジーは決して手近かな池の水をくもうとはしなかったそうである。彼にとって火を消す“もの”は、オケの中にはいつている“何か”であって、池の“水”ではない。もしオケの中にガソリンを入れておけば、彼は喜んでタキ火にガソリンをかけたにちがいない。もっとも、2度とくりかえしてはやらなかっただろう。

ここでも、チンパンジーの思考が具体的・即物的であることが証明されている。箱を、バナナをとるための“道具”とは理解できなかったのと同様、オケの水と池の水と同じ“水”一般であるという、いわば抽象概念としての道具や水は、チンパンジーの理解の外にある。抽象概念というものは、どうやら人間だけがあやつれるものであるらしい。もっとも、我々はほとんど意識せずに抽象概念をふだん扱っている。たいていの人は、「サカナ」とか「トリ」というものが実在してると思っている。ところが、「サカナ」も「トリ」も抽象概念であって、実在しない。ウソだと思う人は、私のところへ「サカナ」と「トリ」を持ってきてほしい。マダイやマイワシ、あるいはミツクリエナガチョウチンアンコウ（いちばん長い標準和名の魚）なら持ってこれる。そういった具体的な種を2万ほど（化石を含めるともっと多い）集めた総称が「サカナ」であって、サカナというサカナは存在しない。まあ、たいていの魚は酒のサカナにはなるが。プラトンによると、しかし、理想的な「サカナ」は天上に存在していることになっている。地上にいるそれぞれの魚（種）は、その写しにすぎない。天上には、理想のトリや理想のツクエや理想のクツがあり、これらを「アイデアという。プラトンにとって、真に実在するものはこれらのアイデアの方であり、地上のものはその影にすぎないのである。ここから、ドイツ語のイデアリスムス、英語のアイデアリスム、すなわち観念論（唯心論）という言葉が由来する。だから、観念論とはもともとは理想主義のことである。私の尊敬おくあたわざる、元京大全共闘の経済学史家がいる。私が金沢へ来たころ、私のところへ現われて、教養部の学生に聞かせている講義なるものを一席しゃべってくれた。何でも、スミス、リカード、マルクスが出てきて、地上にはじまって天井へ行き、くると一回転して地上へもどるといような話で、何のことやらさっぱりわからなかった。何しろ尊敬している人だから、わからんとも言えず、うなづいてさいごまで聞いていたら、おかげでやっとまとまると、大変喜んで帰ってしまった。聞いているだけでお役に立ったらしくこれなら案で良いと思ったが、単位をとらんならん学生さんはさぞ大変だったろうと同情した。大学の教官、なかでも真面目な先生ほど、学生の理解力を高く評価して、難しいことを講義する

傾向がある。私は、娘が大学1年生になったとき、はたとこの真理に思いいたった。「こりゃ、難しいこと言うてもあかんわ。」

ところで、私は話を聞いても本を読んでも、難しくわからんときは、「この人は観念論者やな」と考えることにしている。結構当るから不思議である。この経済学史家にも、「あんた、観念論者とちゃうか」など、失礼なことをたずねたりした。彼は、初めは怒っていたが、しまいには開きなおって自認し、「イデアリスムス言うたら理想主義ということや。現実主義者よりずっとましや。」私は、この時はじめて、観念論＝理想主義ということを知ったのである。もっとも理想はイデアだから、天上にしかない。地上に理想をさがす人は、だから大変苦勞する。

それでは、地上には何があるか？ それは物質、つまりマテリアルであって、物質主義のことをマテリアリスムという。哲学的には唯物論とよばれているものである。この唯物論と観念論とは、遠くギリシアの昔から仲が悪い。天上の高貴な方々と、地上の欲深連中とのケンカといえは、当然とも遠くはない。

あまりこんなこと言っていると、「哲学雑話」の野良氏におこられるから先を急ぐが、要するに、サルは典型的な唯物論者であって、高貴なる観念論は理解できない、ということなのである。サルの系統をひく人間だって、やはり唯物論の方がわかりやすい。「せきつい動物とは何か」というような問いは、問い自身が観念論的であって、そう簡単にわかるものではない。それを「中軸にせき索が通り、背側に神経、腹側に消化管」といった、まるでせきつい動物のイデアの説明みたいなこといったって、わかったような気はしない。

こんな説明はどうだろうか。「せきつい動物いうたらなあ、クラゲでもタコでもエビでもゴキブリでもなくて、サカナやカエルやトカゲやマンモスみたいなものや。」これは、枚举法といって、具体的な例をできるだけたくさん上げてみる方法である。すると、何となくどんなものかというイメージが出てくる。出てこない時もあるけど。このイメージこそが、天上にあるイデアなのである。イデアをおよそつかんでおくと、理解が深まる。

というわけで、しまいまで読まなければわからないはずの「せきつい動物とは何か」を、前もって説明しようということなのだが、理由の説明だけでくたびれてしまったから、本論は次号にまわすことにしよう。

< 追記 > ビルトダウン人事件の新しい犯人

この間、新聞の広告に、「70年ぶりに解明されたビルトダウン人の真実」という字を見つけた。「クオーク」という、最近はやりのグラフ的科学雑誌の広告である。この連載の第8回(第11号)で、私はこのビルトダウン人事件の紹介をしておいた。新しい“真実”が発見されたのなら、それを紹介し、訂正するのが著者としての義務である。などと、滅多にやらないことを思い立ち、近くの本屋へ「クオーク」を買いに行った。実はそれが大変な難事業であった。

「“コーク”という雑誌の最近号、ありませんか」

「“コーク”ねえ。あんまり聞いたことないけど。ちょっとまって下さい、調べてみますから」
本屋のおじさんは難しい顔をして、ノートをめくり始める。何気なくのぞきこむと、「コ」の
ところを探している。

「“コ”じゃないよ。カナで書いたら“クオーク”だから、“ク”のところだよ」

「何や“クオーク”ですか、それならちゃんとクオークと言って下さいよ」

「すみません」

せっかくあやまったのに、その雑誌は結局なかった。明日本店からとりよせておくというので
あくる日にまた出かけた。

「昨日たのんだ“クオーク”、来てますか」

「あめ、あの“クオーク”ね、来てますよ」

バラバラとめくってみると、どういうわけかビルトダウン人の記事などない。といて、わざ
わざとりよせてくれたものを要らないなどといえば、またしかられそうである。困ったなと思っ
てよく見ると、ひと月前のバックナンバーであった。

こうして“クオーク”1983年11月号を手に入れるために、私は3度も本屋へ足を運び、
その上しかられてあやまったのである。以下の紹介は、したがって、“汗”と“涙”の結晶といえ
よう。心して読んでいただきたい。

ジョン・ハサウエイ・ウインスローおよびアルフレッド・メイヤー（平山定夫訳）

「70年ぶりに解明されたビルトダウン原人の真実 —— 全世界をめざむいたガン作事件のう
らに、あの有名なコナン・ドイルの姿が浮き出してきた」 “クオーク”1983年11月
号：32-43。

ビルトダウン人でっちあげの犯人については、弁護士チャールズ・ドウソンのほかに、ドウソ
ンとともに発掘に当たった当時の大学者アーサー・スミス・ウッドワード、若き日のティヤール・ド
・シャルダンらも疑われた。しかし、1955年にウエイナーが「ビルトダウン人事件」という本
を書いて、ドウソン犯人説がほぼ定説となった。かつて私が読んだ雑誌「自然」の「今世紀最大の
知能犯」という寺田和夫氏の論文も、ちょうどそのころだったから、この本の紹介であったにちが
いない。

ところが、いろいろ調べてみると、ビルトダウン人の発掘現場に出没していた、もう1人の人
物が浮かんできた。「人体解剖と化学に通じた医者であり、地質学を考古学に関心が強く、そして
熱心な化石のコレクター。この人物は、人をかつぐことや冒険が大好きで、複雑に入り組んだ筋書
きを操る才能に恵まれた作家である。そして、これが最も重要な点だが、自信たっぷりの英国の科
学者たちに恨みを抱いていた。」この人物こそ、何をかくそうシャーロック・ホームズの製作人、
アーサー・コナン・ドイルその人だ、というわけである。

ビルトダウン人にシャーロック・ホームズをからませたところまでは、話として大変魅力的であるが、そのあとは大して面白くはなかった。無理はないが、すべて状況証拠しかなく、またドイルがこれだけ手のこんだいたずらをした動機にも、それほど説得力がなかったからである。ドイルが当時、発掘現場から12〜3キロしかはなれていない所に住んでいたこと、ドウソンとも顔なじみで発掘を手伝ったり自動車で運搬してやったりしたこと、ドイル自身も恐龍の化石を掘り出した経験があること、そして、散歩の好きなドイルは発掘現場によく1人で行ったにちがいないし、「掘り起こされたばかりの地層や掘り出し物の山の上に、ガン作を投げ込んでおくには何の苦勞もいらなかった」というわけである。

動機については、次のように説く。少年のころ、ダーウィンとその“ブルドッグ”トマス・ハックスレーに会って感激し、ダーウィン流進化論の熱烈な擁護者となった、エドウィン・レイ・ランケスターなる人物がいた。彼は、「情け容赦なく、神秘主義者をチョウ笑したうえ、紳士的な行動のルールを無視して、科学者をけしかけ、神秘主義との闘争にかり立てた。」このランケスターは、“科学的”推理の結果として、将来発見されるであろう人類の先祖の化石は、脳が相当大きいものにちがいない、と声明していたらしい。ヘッケルもそうだが、どうもダーウィン主義者というものは、予言が好きであるらしい。神秘主義者であったドイルは深くランケスターを恨み、仕返しをするために、ニセの化石人、すなわちビルトダウン人をでっち上げたのだというわけである。

つまり、ランケスターの言ったとおりの化石をつくる。頭ガイは人間、下アゴはオランウータン。そしてそれをドウソンらに発見させる。まんまとひっかかったイギリスのダーウィン主義者たちを、かけて大いに馬鹿にした、というのが、この論文の結論となる。

もしそうなら、しかし、あのシャーロック・ホームズが何故タネ明かしをしなかったかという疑問が残る。この論文の著者もそれが気になったとみえて、それとなくその化石がニセ物であることをほのめかした形跡があると述べる。しかし、先祖発見の名誉に目がくらんだ学者たちは一向に気づかず、さりとてドイル自身が言うわけにいかず、いらいらしていたのではないかと言う。本当に恨みがあったのなら、ここは、自分の名前の彫られた化石を見つけさせてベリンガー教授の息の根をとめた、かのエックハルトとローテック（本誌第11号参照）にならって、シャーロック・ホームズとしては何か工夫あってしかるべきであっただろう。ダーウィン主義科学者がまんまとたまされたことが天下に知れわたって、はじめて神秘主義者擁護の目的が果せるからである。

ドウソンにはそういう動機はなかったと思われる。単純にエライ学者をだましてやった、というのではなからうか。だから私は、やはりドウソン説の方が好きである。

もっとも、犯人がドイルであろうが、ドウソンであろうが、はたまたスミス・ウッドワードであろうが、そんなことは今さらわかるはずはないし、だれだってかまわない。各自、自分にとっていちばん面白いと思う説を信用しておけばいいのである。

<<追記の追記>>

本誌第11号で、ドウソンが見つけた化石にエオアントロプス・ドウソニと名づけた学者は、エリオット・スミスだと書いたが、それは、アーサー・スミス・ウッドワードであつたらしい。エリオット・スミスとは、ては一体何者かという、やはりビルトダウン人の調査にあつた神経解剖学者とのことである。30年も前に読んだ論文を、調べもせずに書いたのだから、この程度の記憶がいはやむを得ない。こうして、訂正するだけでも、まだ良心的(?)と思つていただきたい。

生物学 誇大事典

「帰化」：本来の自生地から人類の媒介によって他の地域に移動し、しかもその後はその地に自力で生存しうるに到ること。それが動物であれば帰化動物、植物であれば帰化植物という。周知の通り帰化植物は繁殖力が強く線路沿いにはびこり、本来の美しかった風景を台無しにしている。ところが、作今日本の大学にはびこっているのは“帰化テーマ”である。これは留学した研究者が外国の偉い先生の研究テーマをワイ小化して日本に移入したものである。このようなことを一般に「縮小再生産」という。“帰化テーマ”は、地下に張りめぐらした黒い根から多額の科研費を吸収して、全国の大学の研究室に繁茂している。しかし、決まってワイ小な花しか咲かせず、さらに結実することは極めてまれである。このようなことを世間では猿マネという。この、身に覚えのない中傷を聞いて、猿は怒ったにちがいない。それ以来怒り続けているためにニホンザルの顔が赤いのだという説は、外国から移入されたものではない。にもかかわらず“帰化テーマ”を持ち込んだ研究者は出世し、大学や学会を牛耳る権力を握っている。 (有馬二郎)

教員採用試験考

流石三十美

最近、とみに教員採用試験の競争率が高くなっているようである。とか、ひと事のように言っているが、なんのこっちゃない、小生自身、氣息えんえんと受けては落っこち、またこりずに受けているのである。そのために使ったお金は約200万円、今度300万円目に突入しようとしている。だから、人は、私の話を傾聴せねばならぬ。

そこでだ。ええかけん頭に来ている教採制度であるが、なにもここで、受かるためには市会議員の推薦が必要で、そのためには教育委員を接待しなければならない（石川県）とか、女の子ならお呼び出しがあれば、教育委員と個人的なおつきあいをしなければならない（沖縄県）とか、それにいじけた男子学生が某新聞に密告したとか（ホンマかいな）、といったことを言うつもりはない。（きっちり言うとするやないか——文部省）

何年も就職浪人をつづけていて一番強く思うことは、大学を卒業した者が、いかに、気楽に、スッと社会へ入ってしまうかということの不思議さである。まあ、入っていく社会自身、そんなに気がまえて入っていくほどのものではないと言え、身もフタもないし、また実際そうらしいのは、アルバイトをしているだけでわかってしまうし、そう書くと、「バイトになにがわかるか」と怒られそうだし、そういうことを考えていると、ちっとも本題に入りそうにないし、実は、そんなことをうだうだ考えている限りは採用試験に受からないということも、わかっているのではあるが。

高校1.5倍、大学3.8倍、教採9.2倍、ええかけんにせえよ、と言いたくなるのだ。そもそも、資本主義社会における（資本主義社会に限らないのかもしれないが）競争試験は、落とすためにつくられているのである。ということとを、どこかで聞いたことがある。早い話、東大を受けたらみんな通ってしまうようでは、東大はパンクするし、そうなると、東大に通ってもなんにも自慢にはならないわけで、あほらしくなる人もいようが、やっぱり今よりは東大生は増えるだろう。高校の教師なんぞはかわいそうなもので、「お前、勉強すれば通るぞ」と生徒をひっぱたくけれど、その子が通ればだれかはその子のために落ちるわけで、極端な話、同じクラスで同じ大学を受けた場合に、そういうケースがおこることもありうるわけで、やっぱり、入学試験

の答案を返すわけにはいかないな、とへんな意見を持ってしまう。大学の先生の場合は気楽なもので、就職先がほぼ教師しかない教育学部でさえ、教員採用試験の指導なんて全くせず（それはそれでいいのだし、短大でそういうことをする方がおかしいのだけど）、むしろ逆に、そんなことを面接で言えば殺されるようなことすら、熱心に教えてくれるし、学生の方は、そういうことなど片っ端から忘れるか、または、面接ではそんなこと片言もしゃべらず、むしろ逆のことを堂々としゃべってくる思慮分別を備えているから、さしたる問題は起こってないようである。

そこで、何が言いたいのかと言えば、いままではそういう問題（短的に言えば思想差別）は比較的起こっていなかったのではあるが（どこかの大学では、自治会役員経験者11人中10人が落とされて、一般の学生——こんな区別は好きではないのだが——の合格率の数分の1であったという例もあるが）、これからは、もっと根の深い、つまり品性ともかかわるようなところで、問題が起こってくるような気がするのである。前に書いた「思慮分別」ということである。

去年、大学で受けた授業の中で、長い大学で初めて感動した授業があった。学校における1つのケースを設定して、そこでの児童の質問に教師が答える一言を考える、というパターンであったが、そこでの1つ。小学校1年生のクラスで、「明日は、楽しい遠足に行きましょうね。先生、みんなとお約束しましたよ。」

しかし、翌日は雨で、振りかえ授業になった。その朝の会の時間に、きかん坊のA君が、先生に抗義にきた。

「先生、きのう約束したやんか。なんで遠足に行けへんねん。行こう、行こうやないか。」半狂乱である。果して先生は、そこでどう言うか。

いろんな答が出た。「雨が降ってるからよ。」「またこんど行きましょうね。」「ほら、今日行くと雨にぬれて風邪をひいちゃうでしょう。」「

しかし、そこで大学の講師は言ったのである。「この先生は、前の日にみんなと遠足に行くことを約束したのである。そうして、A君は、その約束を破ったことに怒っているのだと思う。行けない理由を聞いているのではない。」

なぜそういう答を書いたか、理由を示す欄もあった。「雨にぬれると風邪をひくこともわかってほしい」なんて書いたが、「小学校1年からしっかり教えなければならないのは、約束を守るということである。だから、何をおいても“ごめんね”と先ず先生が言う。そのことが一番の道徳教育になるのではなからうか。」

あやまればすむという問題ではないが、「記憶にございません」というより、まだましだろう。そうして、言われてみれば、なんじゃらほい、というようなものである。しかし、小学校教育には、一番大切なものでもある。

でも、ふと振りかえってみれば、今の社会では、約束を破ったからあやまるというようなことができる人間は少なくなっている。「でもねえ、ほらさ、あの子の家へ行っておよばれになっ

てさ、遅れてしまったのよ。」すぐいいわけが先に出るし、言いわけがあると約束を破ったことも正当化されてしまう。極端になると、約束したそばから言いわけを考えている人もいる。

「あっ、でもね、行けないかもしれないわ、あの子と遊びに行っただから。期待しないで待っててね。」

ええかげんにせえよ、と言いたくなる。自分も似たことをよくやっているようだから、言わないが。

しかし、そんな自分にいや気がさしていることも事実である。小学校の教師になろうとしているのに、そんなこっちゃいけないと思っていることも事実である。

ここに1人の友人がいる。今の社会の仕組に疑問をもち、大学在学中、ずっと生協運動をやってきた熱血漢である。教育科学研究会に属し、将来はへき地教育に一生をうちこむんだといって、へき地教育分科会を背負ってきた。今4年生で、今年教採を受け、クラブ歴を書く欄に、へき地教育研究会と書いてきた。ご多分にもれず、教育科学研究会という所は反体制派であり、体制側から目をつけられている。高校の「社研」のようなものである。案の定、彼はすべった。クラブ歴にそう書いたことが、すべった原因のすべてであるかどうかは、わからない。でも、そう書けば、すべるであろうことは、常識となっている。だから、だれも書かない。彼は、「自信をもってやってきたんだということを、なぜ書いて悪い」といったような目で、私を見る。そこで私は、「要領だよ」と言わなければならないのだろうか。

そうして、事態はますます悪化していく。今年受けた石川県の試験に、こういう問題があった。「今問題になっている教科書問題についてあなたの意見を述べよ。」真底驚いたが、朝日新聞に載っていた教育長の談話（確か石川県の教育長だったが）を、そのまま書いた。このくらいの思慮分別はもっているつもりであるから。しかし、相手もさるもの、今度は大阪府での面接の話。

「あなたがたが今しているリクルートカットと背広姿についてどう思うか。」

「余り好きではありません。」

「それはどうしてか。」

「画一化されすぎているから。これに限らず制服というものも……」しまった、と思ったがもう遅い。中学・高校と制服がいやでたまらなかつたことが、ヒョコッと首を出しただけなのだが。そんなことを言っではあかんで、とみんな（親父も含めて）に言われた。

またもや大阪府の面接で。

「教師の授業時での望ましい服装は。」

「清潔で、身ざれいにしてあって、汚れてもかまわないものです。」

「具体的には？」

「男なら、スラックスとワイシャツなんかいいと思います。」

「他には？」

「ええっと、ジャージ……、あっ、これは体育の時……、それと体育の後で着がえるひまのなかった時なんか……」

「それについてどう思いますか。」（いかにもジャージなんぞ着るものではない、といった風に。）

これは、私が聞かれた問題ではなかったが、質問者は楽しそうに、返答者はしどろもどろであった。まるで、従順度テストである。

事態はますます進む。石川県では、はねっかえりの教師を徹底的に排除しているようだ。いかに従順な教師を採用しても、はじめの1年くらいは、みなはねっかえりになるという。具体的にはねっかえりがどういう意味なのかはよくわからないが、意気さかんな新採者である。たとえば、学級通信なんかも精力的に出すのだろう。父母を教師の味方に引き込んでしまうことを極端にきらう管理者にとって、これはこの上なくうとうしいことであるのは、十分推察できる。そこで登場したのが、集団討論形式の面接である。3人で、テーマを与えられて、20分くらい討論する。いったい我々は、なにを討論すればいいのだ。その目的は、はねっかえりの排除にある。保守王国石川県において、差別するべき思想の持ち主がそんなにたくさんいるとは氏われない。でも、新採者はみんなはねっかえりになるから、徹底的に排除するのだという。はねっかえりとは、自分の思ったことを言葉にし、実行するものだろう。それを排除するために、集団討論をさせる。こう考えると、要領よく試験に合格するためには、20分間貝にならなければならないことになる。自分の意見を言うてはいけないのだから。そうして、だれかが自分の意見を述べれば「あっ、こいつは落ちたな」とほくそえんで、「まあ、そうですね」と態度をあいまいにしておく。そんな教師が求められているのであろうか。

事態はまだ進む。

問題は、本人だけにとどまらない。石川県においては、親・兄弟が組合活動をやっているものは、採用しないのだそうである。なんらかの形で、本人も影響されるとみるからであろう。教育委員会は、ここまで“配慮”してくれているのである。どこに配慮しているかは別として。そこで、ここに最も可哀そうな犠牲者が誕生する。思想穏健、品行方正、極めて従順、いまの世の中が最高であると信じて疑わない学生が、親が組合活動をやっているという理由であっさり落とされてしまうのである。親よ、ゆめゆめ、組合活動なぞするなかれ。（そんな学生が教師になったときの、生徒の被害を思ってみよ。親はもっと組合活動をすべきである——会長）

戦後、民主教育はなほなしく開花した。大学に入って初めて読んだ「日本国憲法前文」に感動したことを覚えている。また、つい最近、友人に「面白い本があるぞ」と言われて読んだ「憲法の話」も素晴らしい。「おい、いい本やな」というと、友人はニヤッと笑って裏表紙を

指さした。「発行、文部省」（ただし昭和22年のもの） 聞いた話では、民青の県委員会で、これを勉強しているそうである。もう、いやっ。

しかし、もういや、ではすまされないかもしれない。確か朝日新聞だったと思うが、アメリカ国民の世論調査で、題名を見せずに「アメリカ独立宣言」を読ませると、70%くらいの人が「共産党の宣伝や」と答えたそうである。また、ほんまかいなとまだに信じられないのだが、友人が、中学・公民の実習で、授業の導入に「日本の政党名を知っているだけ言ってみろ」といったところ、40名のクラスで、結局、政党名全部は上らなかった、という話もある。いったいどうなっているのだろうか。

うそをついたり、約束を破ったりしても、すぐあやまれぬ、自分の意見を言えない、自分の意見があっても言うことを許されない、先生が、またたくさんつくり出されていく。それどころか、本を読むことさえ拒否する学生もいる。「著者の意見に左右されたくないから。」そういった彼は、もう教師として教壇に立っている。

その行きつく先は、もうわかっているつもりである。「われら生涯ヒラ教員」。教育正常化県“静岡”のお話。

友人が言う。「だからこそ、要領を身につけて、早く教師にならんとあかんのや。」

もういや、というしかないようだ。でも、今年は「鉄面皮」になる練習をしようと思う。私はこの世で生きるしかないのだから。

（会長 注：聞くところによると、著者は今年も「鉄面皮」をつけ忘れて落され、遂に転身して現在、ある技術学校に通って勉強しているとか。高卒の同級生にかこまれて、「級長」などやって、ごきげんなのだそうです。“若者”は何を考えているのやら。）

原稿募集

当会会員には、すでに教師となっている者もたくさんいます。とくにややこしくなってきた教育の問題について、高説・低説・正説・邪説から単なる感想にいたるまで、何でも結構ですから原稿をお寄せ下さい。 (編・集局)

“1000メートル以下クラブ” 始末記

奥野良之助

私のいる金沢大学理学部生物学科に、「生物クラブ」がある。これは、生物学科の教官と学生のうち、生物の好きな者が集まってつくったクラブで、時たま旅行して自然を楽しむことにしている。生物の好きな者が生物学科へはいるのだから、生物学科の生物クラブなどおかしいではないかと思われるだろうけれども、最近は実はそうでもないのである。このころでは、生き物をすべてすりつぶし、ふりまわし、吸取紙にしみこませて研究するのが近代的とされている。学生の方も共通一次試験で輪切りにされ、「まあ、君は金沢大学の生物学科くらいなら受かるよ」てなこと言われて、こく素直にはいってくる。教官も学生も本当に好きなのは、生物ではなく“生物学者”であるらしい。だから、生物学科の“生物クラブ”は、いまや貴重な存在なのである。

もっとも、私が金沢へ来た10年前は、3度のメシの次ぎくらいに生き物や自然の好きな者が、少なくとも学生の中にはたくさんいた。ある学生は、理学部と並行して建っている教養部の換気孔にキセキレイが巣をつくっているのを見つけ、自分の部屋から毎日朝から晩まで双眼鏡で観察を続けた。ところが、教養部の女子学生の間にも、理学部に私たちをのぞいているチカンがいる、というウワサが立った。彼は、のぞかれるほど魅力のある奴はいないではないか、キセキレイの方がずっときれいだ、と一笑に付したが、ふだんの言動からみてその双眼鏡に何が写っていたか、私は深く疑っている。その彼がある日のこと、血相を変えて私のところへ現われた。

「先生、怪しからんですよ。」

「何が怪しからんのや。」

「キセキレイのヒナがね、初めて巣の外へ出てきたんですわ。」

「結構なことやないか、それやったら。」

「ところがね、トビが2～3日前から近くで待ちかまえてましてね。」

「へえー、そりゃおもしろいね。知ってたんやな、そのトビは。」

「おもしろいことなんかありませんよ。そのトビがヒナめがけてとびかかったんですよ。」

「いいとこ観察できたな。減多に見られん見物やで、それは。それでうまいことヒナをつかまえよったか、トビは。」

「そんなもん、見てるヒマないですよ、階段を3段づつかけおいて、すっとんでいったんですから。」

「危ないな、何して行ったのや。」

「決まってるやないですか、ヒナを助けに行っただです。」

「不思議なことするな。それで間に合うたか。」

「いや、間に合いませんでした。トビは追いはらってとりかえしたんですが、ヒナはもう死んでました。」

「それで何が怪しからんのや。」

「何がって、トビがですよ。せっかく巣立ちまでこぎつけたのに、殺されたんですよ。」

「そのヒナの死体はどうしたの。」

「ハクセイつくろうと思って、冷蔵庫に入れてあります。」

私は彼に、トビもまた子供を育てていること、キセキレイの巣立ちを何日も待っていたトビの、それは正当な報酬であること、そのトビのうわ前をはねた君がいちばん怪しからん存在であること、したがって、ヒナの死体は即刻トビに返してやるべきこと、を、ことをわけ、すじ道を通し、コンコンジュンジュンと説いて聞かせたのであるが、キセキレイの色香に迷った彼は全く受けつけてくれなかった。

さて、このような自然と生き物を愛好する学生たちは、どういうわけか、金沢の南にそびえ立つ霊峰白山によく登る。ある学生などは在学中毎年10回以上登っていた。初めは夏だが、少しなれてくると冬にも登る。雪が5～6メートルも積っているところへ登るのだから、登山も雪もきらいな私からみれば、全く正気のサタとは思えない。その上、苦勞して頂上まで登ったら、そのまままた降りただけだから不思議である。その学生はクマに合うことを熟望していた。しかし、数十回も登ったのに一度を合えなかった。彼があまりになげくので、私はなぐさめてやった。

「君は気がつかなかっただろうけど、クマの方はきっと、君を見ていたにちがいないよ。」

「本当ですか。出てきてくれたらよかったのになあ。」

「そりゃ無理だよ。君の顔を見たら、クマだって恐くて出てこれないよ。」

彼はその後しばらく、口をぎいてくれなかった。

こうした学生たちは、新任の生態学講座の教官としてやってきた私を、しきりに白山へ連れて行きたがった。白山の自然のすばらしさを私にも感じさせてやろうという親切心もなくはなかったが、それ以上に、口ではどうしても勝てない私を白山に連れ出し、くたびれ果てたところで仕返しをしてやろうという思惑があったことはまちがいない。私にだって身を守る権利はある。

「先生は生態学の教官でしょう。白山の自然を知らずして何が生態学ですか。よう登らんのとちやいますか。」

「白山くらい登るのはわけではないけどな。実はある団体には行って、高い山は登ったらいかんことになってるんや。」

「何の団体ですか、それ。」

「“1000メートル以下クラブ” いうてなあ、そのクラブへは行ったら、1000メートル以上の山の登山は禁止されるんや。」

「……………」

学生たちが目を丸くしたのも無理はない。私だってその瞬間まで、そんなクラブは知らなかったのだから。でも、口に出したからには、何とかかこうつけなければならぬ。そこでもっともらしく、会則をでっち上げた。といっても次の二ヶ条である。

第一条 会員は1000メートル以上の高地に登ってはならない。

第二条 会員は、自ら高地に登り自然を破壊しながら自然保護をとらえている偽善者を断固キユウ断する義務を持つ。

ダンブカーのような巨体で山の中を走りまわって調査し、毎年数百ページの論文を発表して、東南アジアの森林を裸にしつつある、かの自然保護論のエース、宮脇 昭 横浜国立大学助教授（もう教授になったかな）の説によれば、高山地帯は特別に破壊に弱く、また“ふみつけ効果”といって、人間がふみつけただけでもしまいには木が枯れる、ということである。白山のような山は、だから、人が登っただけでも荒廃していく。真に山を愛し自然をいつくしむ人は、登りたいのをじっとこらえ、下界がらながめるだけで我慢しているものなのである。山登りの好きな人は自然愛好者などではなく自然の破壊者と言わざるをえない。それを自認しているのならともかく、山に登って自然を破壊しながら自然愛好者のような顔をし、その上他人に自然保護を説き、あまつさえ山登り、すなわち自然破壊を強制するなど、言語道断、まさに許しがたい。我が“1000メートル以下クラブ”は、かかる怪しからぬ奴どもを批判追及する団体なのであり、かく言う私が創立者で会長なのだ。

「そんなこと言ったら、1000メートル以上のところに住んでる人だっていますよ。そんな人はどうするんですか。」

「住むんなら1万メートルでもかまわん。君らもどうしても登りたければ、降りて来なければいいんだ。」

「どうあっても登ったらいかんと言うんですか。」

「そんなことはない。どうしても登りたかったら登ってもええけど、“ああ、オレは自然のハカイ者や”と思いつつ登らんといかん。」

「先生登らそうと思うたら、どうしたらええんやろな。」

「そやな。白山にロープウエーつけるいうのはどうや。そんなら登ってもええで。」

「それこそ自然破壊やないですか。」

「つくる時さえちょっと用心したら、あれは破壊が少ないで。何せ空中飛んでいくんやから。それに、年寄りでも病人でも行けるようになるしな。」

「そんなの、ちょっともおもしろないわ、ロープにのって山へ登ったりしても。」

「その考えがまちごうとる。白山は若者だけのものではない。みんなで平等に楽しまんといかん。君らののは白山の“私物化”や。」

私の友人に水原洋城という男がいる。彼のペンネームを鮎野公平というが、「これはなあ、アア言ウト・コウ言ウト読むんやで」とのことである。学生時代この男に鍛えられた私も、学生ごときに口では負けるわけがない。もっとも、だからこそ彼らは私を白山へ連れ出したがったのだが。

言い負かされた学生どもはあきらめたらしく、その後何にも言ってこなくなった。そうなるトしかし、こちらもさびしいから、1人々々つかまえて“1000メートル以下クラブ”への加入を強制して歩いた。でも、だれもはいりたがらない。「論理で負けたくせに行動がともなわんとは何事や。それでも“理”学部の学生か」などと言うものだから、みんな逃げてしまう。

それからしばらくして、ちょっと都合の悪い出来事が起こって、加入の勧誘は止めることにした。

息子が高校を卒業することになり、もう親といっしょに旅行することもないだろうというわけで、お別れ東北旅行というのに出かけた。すべて息子の立てた計画に乗ったので、のんびりと旅を楽しんでいたのだが、ある日バスにゆられて着いたところが、八幡平（はちまんたい）の頂上であった。バスから降りて、はっと気がついた。

「しまった、ここは1500メートルだ。」

<< 書 評 >>

「車を捨てた人たち」

田中公雄著 日経新書 480円

最近おかしな本が出たの。本当におせっかいだと思うわ。日本は自由主義の国だもの、車に乗るかどうかは私の勝手よ。

私はいつも安全運転してるから、事故なんか起こしっこないわ。万が一、事故が起こったとしてもたくさん保険には入っているから安心だわ。けがをした人や死んだ人にも保障金を充分払えるもの。子供の飛び出しなんて、あれは親の仕つけが悪いんだわ。私の子供が小さいうちは心配だったから、うちの広い庭で遊ばしたわ。もちろん門にはカギをかけて外に出られないようにしてたから安心だったわよ。道路で遊んでいる方が悪いのよ。

歩いている人って、あれはバカか貧乏人ね。車に泥をかけられるのがいやだったら自分も車に乗ればいいのよ。私なんか水たまりがあってもスピード落とさないわ。水たまりがあるのが悪いのよ。万が一泥水をかけたら、その時は洗たく代を弁償すればいいのよ。だけど横断歩道がたくさんあって、早く走れないのよね。あんなのはみんな歩道橋か地下道にしまえばいいのだけわ。

私は大学に勤めてるんだけど、駐車場が狭くて困るわ。毎朝空場所を探すのが大変よ。仕方がないから道路に駐車するのよ。そうよ、グランドなんかつぶして駐車場にすればいいのだけわ。邪魔になる木なんか全部切ってしまうればいいのよ。植物園なんてあんなのむだだわ。駐車場にってしまった方が便利よ。私はどうしても車に乗って来るんだもの。

排気ガスに有害物質があるって言うけど、私の車は法律の規制に合格してるからいいのよ。発ガン物質とか窒素酸化物だって、私の車1台が出す量なんてほとんどゼロだわ。それに私の家は郊外の空気のきれいな所にあるから、私の家族は大丈夫だわ。

車に乗ってると体力がなくなるって言うけど、私は毎週エアロビクスやヨガ、それに水泳でしょ、週末にはテニスもするし時々ゴルフにも行くから心配ないわ。行きつけのブティックの流行のドレスを着て、車でレストランに行っておいしいものを食べるの、これが文化的生活というものよ。

私は進歩的文化人だもの、当然自民党には投票しないわ。だけど自民党が政権を持っているのがいいと思うわ。うちの家の一軒おいて隣に社会党の議員さんがいてね、とても気さくな人よ。近所の道路がきれいに舗装してあるのはあの人がいるおかげよ。この間ね、駐車違反でつかまった時頼んだら、警察に掛け合ってくれてもみ消してくれたわ。あんなの駐車違反じゃないわよ。だけど十軒ほど向うにも公明党の議員さんがいるのよ。高級住宅街だもの議員さんもたくさん住んでいるの。向こうの方がもっと親切だったら、今度は公明党に投票しようかしら。だけど公明党はあまり

文化的な感じがしないのよねえ。

そうそう文化的といえ、私チヨウチヨを集め始めたのよ。チヨウチヨを採集するには車は絶対必要だわ。ねえ、白山でチヨウチヨの採集を禁止するなんておかしいと思わない？ 他人の趣味を邪魔するなんて間違ってるわ。そうよ、採ったってかまわないのよ本当は。つかまる人がドジなんだわ。チヨウチヨをたくさんつかまえて、殺してナフタリンの箱に並べておくの、きれいでとっても文化的だと思うわ。特にチヨウチヨの胸をプチュッと指で押す時のあの快感、何とも言えないわ。文化自動車で文化的にチヨウチヨを採集するなんて、本当に文化国家に生まれて良かったわ。車でもうひとつ文化的と言えれば交通事故ね、顔がぐちゃぐちゃになったり、腹から腸が出て垂れ下がっていたり、ガソリンに火がついて焼けて黒こけになっていたりしてね、あれなんか本当に文化の象徴と言っべきだわ。

日本の車は安くて性能がいいし、故障もしないからいいわ。だから外国に売れるのよ。外国にもどんどん売って大量生産すれば私はそれだけ安く買えるのよね。ベルトコンベアで働くのがそんなにいやなら、そんな人やめさせてロボットに働かせればいいのよ。人間よりロボットの方がいい車を作れるわよ。外国にたくさん売って外貨が余ったら、それで農産物を買えばいいのよ。牛肉やオレンジがたくさん輸入されて農家が多少困ったって、それは仕方がないわ。補助金さえ払えば農家は文句を言わないわよ。私が車を安く買えるかどうかの方がもっと大事だわ。

でもね、車ってガソリンがないと走れないのよね。だからシーレーンは是非守ってもらわなくてははいけないわ。だってシーレーンが守れないとガソリンがなくなるんでしょう。私は税金をちゃんと払ってるんだもの、当然ガソリンを手に入れる権利があるわ。車に乗れなくなるんだもの、絶対だわ。でもあれだけ広い所だから自衛隊じゃ守れないかも知れないわね。そうだわ、日本も原子爆弾を持つてばいいのよ。アメリカとかソビエトのは攻撃用だから悪いけど、日本は防衛だけに使えばいいのよ。原子爆弾を持つていればどの国だって、そう簡単にタンカーを攻撃できないわよ。作ろうと思えばすぐにも作れる技術はあるんだから、そうすれば安く解決できるのよ。

私って国際問題にも興味があるのよねえ。あら、確かこれ書評だったわねえ、少しずれたかしら。それではご免あそばせ、オホホホホ。

< 下 菊 マ ダ ム >

丹 後 だ よ り

元 編 集 局 長

現 丹 後 支 部 長

長い学生生活から足を洗い、さまざまな期待とともに住みなれた金沢を離れて、はや半年。今年の「学会誌」にバラ色の表紙をもって、私の門出を祝ってもらったにもかかわらず、バラ色でもピンクでもない、灰色の日々が続いています。その前ぶれが、前号における編集局長の解任。この件については全くの誤解であり、私の無罪は明らかなのですが、かの元首相も無罪だと言いはってやめずにいますし、ここは模範とすべく、いさぎよく辞任することになりました。そこで新たに支部をもうけ、その支部長として細々と通信を本部に送ります。支部名も、本来なら関西支部と名のりたいたところですが、つましやかに、丹後支部とします。丹後半島、丹後ちりめん、丹後オイルサーティンの丹後です。

さて、まず最初に、けさ回ってきた回覧板にはさんであった市の公報をみでみると、「今月のくみとり予定表」。いなかへ来たもんだなあと改めて実感。次いで、「エネルギー研究所環境現況調査終る」「関西電力が新しいエネルギー利用に関する研究を行うとともに、出力37万5千キロワット二基の発電設備を設置し、温排水に関する研究を行い、併せて電力供給の改善に役立たせたいとする……」。つまり、エネルギー研究を名目に、70数万キロワットもの火電を建ててしまおうというもの。電力会社もだんだんやるのが巧妙になってきた。今回の調査は、海、空、陸にわたる環境の現況調査で、この結果をもとに、まもなく環境影響調査書が出されるという。この動きに対して、住民の側もだまっていはいないようだ。さて、どんな運動が作られてゆくことか。

話は一転して、私の勤める学校にて。9月30日、衣がえを明日にひかえ、生徒部長の放送。「一せいの衣がえ強制に対し反発を感じる者もあるかもしれないが、これは日本古来からの伝統であり、我々はこうした伝統を守ることにおいて、ガンコであらねばならない。特に、姿なき管理社会といわれる今日において、ガンコであることが身を守ることにもなるのである、うんぬん。」暑かろうが寒かろうが決められた日に全員そろって衣をかえることが、管理社会から身を守る……？

さて翌日、全生徒は例外なく冬の制服に身をつつんで登校。思わずとなりの若い同僚に、「まじめに着てくるなあ」とほやくと、「ほんとに見ていて気持ちがいい！」と彼。全く、こういう場所にいると、自分の感性が異常なのではないかという不安にとらわれる。

中間試験での答案から。

問 「次の歌詞について、進化的あるいは人生的に論ぜよ。」

ああ 人は昔々 鳥だったのかもしれないね
こんなにも こんなにも 空が恋しい

中 島 み ゆ き

答 A 「空が恋しいからというだけで、人が鳥だったとはかぎらない。」

B 「自分の趣味で問題づくりやがって、テストを私用につかうのはよくない。」

C 「昔々 ゆたむ と ゆてむ は木の上に住んでいた。ある日 ゆたむ は恋する ゆてむ が空へと旅立ったのを追って、自分も空を飛ぼうとした。しかし ゆたむ はとてもどじだったので、木からおこちてしまった。それでしかたなく地面でくらすことにした。地面での生活はみじめだった。けものにもおそわれた。でも ゆたむ は負けなかった。がんばった。そして立派に生きのびた。それでも ゆたむ はやっぱり ゆてむ のことが忘れられなくて、空を見上げては歌うのだった。ああ 人は昔々……。」

<<< 編集局だより >>> パート 1

今度新しく編集局長に昇格いたしました。よろしくお願いします。

ところで、私ははたして何代目の局長になるのでしょうか。そのところを会長に聞いてみました。

局長：私で何代目になるんですか。

会長：学会誌を最初から読んでいけばわかるやろ。局長になったんやから、それくらいのことはやっつけ。

局長：でも、うわさによると、最初のうちは会長が二役でやってたとか。

会長：そんなことはない。けど、たまには「編集局だより」を代作するようなことはあったな。

若い奴はなかなか書かんからな。前の局長のときも、半分くらい、オレが書いてやった。

局長：それは気がつかなかったなあ。文章読んだだけでは区別が付きませんね。

会長：編集局長やってると、文章まで会長に似てくるんや。文章はその人柄をあらわす。君も覚悟しとけよ。

局長：怖いなあ。ひょっとして、今飲んでるこのコーヒーに何かは入ってるのとちやいますか。

会長：ふふふ……。ところで、君、君は本当に実在してるんかね。

局長：えーっ！？ どういうことですか。目の前にいるじゃないですか。

会長：見えるからといって、ほんまに居るかどうか、わからへん。目なんか信用でけへんもんな。

局長：……？

なにやら怪しげな役についてしまったようです。ともかく確かなことは、創立以来会長だけはずっと同じで、これからもやめそうもない、という事だけです。

<< 編集局だより >> パート 2

エー、この度私は独裁会長より編集局長補佐なる大役に任命されました。しかし補佐が何等級に相当するのかはまだ聞いておりません。局長が一等級だとすると補佐は二等級になるのでしょうか。そうだとすると、私は四等級から二等級に大出世することになるのでありますが……。

(ホサれている補佐 —— 有 二)

<最近の若いモンは仕事もせんと待遇ばかり気にしよる。なげかわしいことじゃ —— 会長>

<編集局長補佐は、そんなに若いことおへんですよ、局長は若いけど。 —— 編集局長>

- ◎ このところ、編集局の人事が非常に混乱している。前号で、編集局長を解任したところが、すぐに電話がかかってきて、ちゃんと手紙は出したはずだ、ぬれぎぬだ、と怒ってきた。そこで私の机の上をさがしてみたら、山をなす書類の下からたしかに手紙が出てきた。いかに万能の会長といえども、まちがうことだってある。たちまち前言をとり消して、編集局長を復職させた。しかるに編集局長は、今度は辞任したいという。あまつさえその上に、新しい編集局長まで任命してしまった。これで彼は、3つの罪を犯したことになる。会長の命令に反抗したことが2回、会長の権限を犯したことが1回。これは、会員の身分をハクダツするに必要にして充分な理由になると思えるが、除名してもすぐ加入するだろうし（入会金を決めておくのだった）、その上、新会長まで任命するかもしれない。ここはそっとしておくことにしよう。
- ◎ 編集局長を解任したあと、たまたま会ったある会員に、「お前、編集局長をやれ」と命令した。ところが、すぐまた復職させねばならなくなったので、その会員を編集局次長に格下げすることにした。ところが彼は、自ら編集局長補佐と名のってゆずらない。「次長と補佐とどちらがうんや。同じようなもんやから、任命どおり次長になれ」「同じようなもんでしたら補佐でもええじゃないですか」かくて彼は、ホサに居すわっている。
- ◎ 命令違反、抗命、権限侵犯があいついで、これは独裁生物学会をゆるがす危機ではあるが、もう少し待っていただきたい。そのうち、フテイのヤカラを一挙に肅整してしまうことにしよう。
- ◎ 編集局長補佐：このころ東大の馬場寮の学生がたくさん入会しますね。どうしたんですかね。
- 会 長：東大の教養部で、10年前の“学園闘争”以来落ちこぼれてしまった教官が何人かいてな。生物学会へ入会したのはよいが、頼んだ原稿は書かんと頼みもせんにに学生に直伝してるらしい。
- 補 佐：それにしても、このところの入会希望者は多すぎますよ。20人近くなってるんやないですか。
- 会 長：最近3人5人とまとまっていうてくる連中は、寮生間のコミュニケーションやろ。百円送ったらバックナンバー15冊も、送料持ちで送ってくれるとこなんか、滅多にないもんな。
- 補 佐：そんなことしてるんですか。東大生も東大生やな。百円でそれだけもろて、もうかったとしか考えへんのやろか。
- 会 長：東大生やからそうなんや。ずっと優等生できたら、他人は自分に奉仕するもんやと思いきみよる。ちょっとでも他人の痛みに関のつくような奴は、中学・高校で落ちこぼ

れて、まあ東大へははいっとらんやろ。

補 佐：どんどん来て、東大生に占拠されたらどうします。機動隊でも呼びますか。

会 長：そんなことせんでも大丈夫や。我が学会は“会長独裁”で、会長の命令はたとえどんなことでもきかんらんことになっとるやろ。東大生がみんなはいったら、いっせい蜂起の指令を出して革命をやらせる。成功すれば良し、失敗すれば機動隊が片をつけてくれるやろ。

補 佐：なんやボクまで恐わってきた。会長にそこまで権限があるとは知らなかった。

会 長：それは君の認識不足やで。ところで、たくさんはいった東大生がまじめに原稿送ってくるかどうか、カケしょうか。

補 佐：10人に1人くらいは原稿送ってくるのもいるのとちやいますか。

会 長：オレは1人もおらん方にかける。卒業・就職して会費を1000円払わんらんようになって、住所変更のとどけを出す奴も、1人もおらんと思うけど、君はどう思う。

補 佐：1人くらいはいるでしょう。これもかけますか。

会 長：よし、決まった。コーヒー2杯、いただきや。

◎ 年末ぎりぎりに第16号を無理して出したのは、ほかでもない、前編集局長の強要で使った品のないピンクの表紙の紙が余っていたからである。来年は、日本生物学会にふさわしい、もっと上品な色を使うことにしよう。局長も代わったことだし。

◎ 会友 水原洋城氏に、学会も発展の一途をたどっているから、わがシンボルマークの“小鬼”も、それにふさわしく書きなおしてほしい、と依頼したところ、この号の表紙のような絵を送ってきた。なんとまた卵の中に閉じこもっているではないか。もっとも、ツノとシッポと片手を出して、片目でのぞいているところなど、わが学会にふさわしいのかも知れない。当分、このマークでいくことにしよう。

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこばまない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同カードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

< 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、何としても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはいらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ
記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

日本生物学会誌 第16号 1983年12月24日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載